平 成 18 年 度 財 団 法 人 東 洋 文 庫 事 業 報 告 書

財団法人　東 洋 文 庫

理事長　斯 波 義 信

平成19年3月31日現在までに行われた財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事 業 内 容

事業項目

Ⅰ　調査研究

Ⅱ　資料収集･整理

Ⅲ　研究資料出版

Ⅳ　普及活動

Ⅴ　学術情報提供

Ⅵ. イスラーム地域研究資料室

Ⅰ. 調査研究

A. 超域アジア研究

（１）「現代中国の総合的研究」（超域アジア研究部門、現代中国研究班プロジェクト研究）

1949年の革命、とくに1980年代以降、国内で政治、経済、社会の激変を経験し、東アジアから世界にまで政治・経済的な影響力をもちつつある現代中国の全容を、歴史・文化の流れを含めて総合的に分析する研究体制（資料、政治と外交、経済、国際関係・文化）を編成した。また、関連する基礎資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点にしながら、学際的研究・公開利用の観点から拡充と再編を行った。

［研究実施概要］

「現代中国研究班」では、各研究グループが、平成17年度より開始された台湾中央研究院との学術交流協定に沿う資料・研究交流を実施した。昨年度、経済グループがその研究成果を英文雑誌 *Modern Asian Studies Review* 創刊号に発表したのにひきつづき、政治・外交グループが、同誌の第2号に成果を発表した。また、国際関係・文化グループは、平成15年度以来の研究成果をとりまとめ、『日中戦争期の中国における社会・文化変容』として刊行した。なお、平成17年度に英文論叢Toyo Bunko Research Library（以下TBRL）No.8 *Restructuring China-Party, State and Society after the Reform and Open Door-* を刊行した経済グループは、平成19年度以降の成果発表にそなえ、他のグループとともに定例研究会の開催を継続実施中である。

（２）「現代イスラームの超域的研究－議会主義の展開と立憲体制に関する比較研究－」（超域アジア研究部門、現代イスラーム研究班プロジェクト研究）

本プロジェクトでは、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書（アラビア語、ペルシア語、トルコ語）を分析し、それぞれの地域（国家）に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討することを通じて、中東・イスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を総合的に考察する。

［研究実施概要］

「現代イスラーム研究班」では、まずトルコグループが、平成16年度から継続しておこなってきたトルコ議会資料の収集・分析の成果をとりまとめ、『トルコにおける議会制の展開-オスマン帝国からトルコ共和国へ-』として刊行した。この論集には、オスマン帝国憲法とトルコ共和国憲法の翻訳が含まれる。平成17年度に成果を刊行したイラングループでは、引き続きイラン議会文書の分析と研究を続行した。また、アラブグループにおいては、トルコグループと連携して議会関係資料の調査・分析をおこない、*A Guide to Parliamentary Records on Monarchical Egypt* を刊行した。3月には合同研究会を開催し、各グループが研究成果を報告するとともに、平成20年度に全体の成果として公刊する英文叢書の作業について検討し、アラブ・イラン・トルコ各グループとも執筆者の選定に入った。

B. アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動態的な発展を理解する上で、各民族が有する個性豊かな歴史と文化の基礎的研究が欠かせない。本研究は、アジアの現状に影を落としている歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を実施中である。

＜東アジア研究部門＞

（３）前近代中国研究班

①「中国古代地域史研究　ー『水経注』の分析からー」

『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注を考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析することによって、中国古代の地域社会の構造を再検討する。

[研究実施概要]

a) 陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとして、隔週の研究会において、その巻17・18・19「渭水」(甘肅省に発し、陝西省咸陽の南、西安〔長安〕の北を経て黄河に注ぐ)の部分を、旧ソ連製('78年、1/100,000)の詳細な航空写真およびアメリカのランドサット衛星地図とを重ね合わせ、継続して諸注及び諸校訂を丁寧に検討し読み進めている。

b) 平成17年度に実施した渭水流域の陝西省岐山県周公廟遺跡等の現地調査報告を『陝豫訪古紀行―中国陝西省・河南省地域考察旅行報告―』として刊行し、国内および中国の関係研究者に送付して、我が班の研究・調査内容への検討・批判や今後の研究への協力を要請した。

c) 20世紀以降の中国における渭水流域の諸遺跡の考古学的調査・発掘の報告書を集め、この地域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせ検討し、渭水流域の古代の自然・社会的実態により具体的に迫るよう努める。この成果を平成19年度に『水経注』巻17・18（上巻）の訳注として刊行する。さらに同巻19（下巻）の出版準備を開始した。

d) 上記『水経注』巻17・18訳注刊行のため、平成19年度初頭に『水経注』記載の渭水上流地域の実地調査をおこなう。その準備として、日程・調査地域・調査内容の具体的確定のための協議をおこない、また同調査に協力を願う陝西師範大学の歴史地理学の諸研究者との協議を進めた。

②「宋代社会経済史用語解の作成」

このほど完成した『宋史』食貨志の諸篇の訳注、およびすでに整理作業を経た『宋会要』食貨の諸篇語彙索引資料にもとづいて、宋代社会経済史研究の推進に寄与する《用語解》を作成し、データベース化して公開する。

[研究実施概要]

a) 東洋文庫既刊『宋史食貨志訳注（一）～（六）』(昭和35年～平成17年）に収まる用語解釈、および東洋文庫の《宋会要輯稿食貨篇語彙索引》事業（昭和39年～）で蓄積した資料を中心にして、宋代の経済史・社会史の研究に役立つ《用語解》を作成しデータベース化するための作業を進めた。

b) 登載語彙を選定し、各語彙に付する範疇別・時期別・地域別のコード・サブコード、解説、用例、出典の注記法についての共通の準則を検討した。

c) 『宋史食貨志訳注（一）～（六）』および《宋会要輯稿食貨篇語彙索引》の資料の大半をデータベース化した。また上記 b) の共通準則のもとに作業の分担を決めるべく、定期的に会合して調整をすすめた。

d) 平成17年度までに刊行した『宋史食貨志訳注』（五）および（六）にもとづき、『宋史食貨志訳注（五）（六）語彙索引』を刊行した。

e) 『晋書食貨志訳註』を刊行した。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(2)」

平成14・15・16年度と続けて、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として平成16年度に『東アジアの都城と渤海』（全394頁）を公刊した。しかしながらその中心的なものであった、渤海上京龍泉府址（東京城）出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、整理に手間取り、一部の遺物の調査・研究については、平成17年度以降、継続実施する。

[研究実施概要]

a) 本研究班の小嶋芳孝と田村晃一は、7月に中国吉林大学で行われた遼・金・蒙元期の都市に関するシンポジウムに出席し、報告や総括を行った。その際吉林省白城市所在の遼代に建設された土城2箇所、黒龍江省阿城市所在の金の上京会寧府跡などを踏査した。8月には小嶋芳孝、清水信行と田村が陝西省西安市を訪れ、中国社会科学院考古学研究所西安
研究所にて唐大明宮太液池出土瓦などを調査し、渤海上京龍泉府跡出土瓦との比較研究を行なった。現在、その結果をとりまとめている。なお最近復元された大明宮含元殿跡や麟徳殿跡のほか、漢長安城の遺構、法門寺博物館などを見学した。

b) 『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を刊行した。これには東京城出土遺物のうち、塼についての報告と、遼金時代の都城踏査記を収録した。

④「前近代中国の法と社会(2)」

宋から明清時代にかけての戸婚・田土・銭穀などに関する法を、判例を中心に明らかにし、前近代中国の「民事的」法の特質、歴史的変遷、地方性などを分析し、前近代中国の地方社会の性格、中央政府との関係を考察することを目的としている。17年度に公刊した『宋ー清代の法と地域社会』の成果をもとに、さらに研究を深化させる方向性を検討する。主として宋代以来豊富に残されている判例、契約文書を史料とするために、あわせてこれらの史料の所在を調査し、収集する。

[研究実施概要]

a) 「民事」的法、規範、契約文書などに関わる研究動向およびそれに関する文献(1980年以降) の目録を作成するため作業を行った。

b) 国内外の判牘文集および条例の調査を継続し、収集した史料の整理を行った。

(4)近代中国研究班

①「1910～30年代における日本の中国認識」

(東アジア研究部門、近代中国研究班プロジェクト研究)

近代日本の官民様々な機関が作成した中国実態調査資料の検討を通して、日本の同時代中国認識を明らかにする研究の一環として、平成15～17年度においては、第一次大戦期の日本軍の山東占領にかかわる諸問題に関する研究を実施し、その成果として昨年度『日本の青島占領と山東の社会経済:1914-22年』を刊行した。その3年間で得た成果に拠りつつ時代と対象地域を広げて研究を行う。

[研究実施概要]

a) 日本軍の山東占領期における諸問題について、過去3年間の研究で明らかにし得た問題の総括と残された問題の検討を行いつつ、研究対象時期を1930年代までひろげて、第一次世界大戦期に日本が山東で獲得した経済的基盤がその後日本の華北進出とどのようにつながっていったかについて研究を進めた。

b) 具体的には以下の個別テーマを取り上げ、経済、政治、社会など多方面から研究を行っている。
戦時華北工業調査、華北5省の電力産業調査、華北食料事情調査、華北の鉱山調査、各種調査資料にみる東北への移民問題、旧高商の中国認識、大正期日本人の「支那」イメージと山東、新聞の中国論と日本の国民の中国認識形成、山東における日本人勢力の伸張と済南事件、など。

c) 過去3年間の総括の一環として、9月21日に東洋文庫でシンポジウム「日本の青島占領と山東の社会経済をめぐって―『日本の青島占領と山東の社会経済:1914－22年』をめぐる日中両国研究者による討論―」を開催し、有意義な成果を収めることができた。特に中国の研究者との意見交換を通して中国の新しい研究動向、特に中国研究者による日本の調査資料の利用状況を知り得たこと、また、日本史の研究者をコメンテーターに迎えて日本の中国進出について中国史・日本史の両面から検討することができたことは、わがプロジェクトの今後の研究に有益であった。

(5)東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究」

京都大学付属図書館河合文庫、東京大学総合図書館阿川文庫、天理図書館今西文庫をはじめとして、日本各所に所蔵されている近世朝鮮文献資料の歴史学的文献学的研究を行う。18～19世紀の商人関係文書群など、朝鮮半島では類例が発見されていない非刊本資料も多く、その全体像を把握する必要がある。本研究では、文献資料の調査と分析を行い、平成16～19年度の4ヶ年計画でその成果の刊行を期する。

[研究実施概要]

a) 朝鮮近世史研究の基礎的基盤を構築するために、日本散在の近世朝鮮文献資料、主として官民の帳簿や成册などの調査と収集を継続した。

b) 平成19年度に研究成果の刊行を期し、新たに参加を得た研究分担者を加え、資料調査とその分析を行った。

②「清朝満洲語・案資料の総合的研究」

近年、中国清朝満洲語・案資料の重要性が注目されてきているが、清朝の基盤組織である八旗のひとつ鑲紅旗満洲の衙門(事務所)の文書群である、東洋文庫所蔵の「鑲紅旗・満洲都統衙門・案」の研究を継続する。同・案には、衙門が設けられた雍正元年(1723)から民国十一年(1922)にいたる、約 2,240 件の文書が残されている。その文書群の「概要」については、すでに TBRL No.1 *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko* に紹介したが、・案のもつ歴史的意味、個別・案の内容等について「研究編」を編み英文での刊行を期す。

[研究実施概要]

a) 東洋文庫所蔵鑲紅旗・満洲語・案の「研究編」(英文)刊行のため作業をすすめた。

b) 「清入関前内国史院・満文・案」(北京の中国第一歴史・案館所蔵)の『内国史院・、天聡七年』(ローマ字転写・和訳・原文写真収載)の出版(平成 15 年 3 月)につづき、「天聡五年(1631)・」および「天聡八年(1634)・」について講読を完了し、出版原稿の作成につとめた。

c) 定期的に研究会を開催し、「崇徳二年(1637)・」、「崇徳三年(1638)・」の講読を継続実施した。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析」

ここでは、西欧による世界の一体化が進展する時代と重なりながら、東アジア・北アジアにわたる大規模な統合を独自に進展・実現させて現在の「中国」領域を形成する軸となった、清朝の国家領域構造と対外関係を総合的に分析する。このために1932年以降の満洲国や現在の中国における自治区・民族問題と清朝史との関わりをも含め、清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築する。

[研究実施概要]

現代中国に直結する清朝の新たな総合的歴史像を提示する具体的作業を遂行した。

a) 清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて個別に史料調査・現地調査を実施し、それを基盤とする専門研究を深化させ、文献史料の調査・整理・分析を行った。その一環として、平成18年9月には、中華人民共和国天津の南開大学において共同研究者が中国研究者との学術交流を実施した。

b) 各専門研究領域の研究成果を持ち寄り、その意義と問題点を総合的に分析することで清代諸領域の相互にわたる総合検討を進める準備段階の一環として、研究会を開催した。また、基礎作業に要する資料や機材を揃えた。

c) 平成18－20年度にわたる3年間の研究成果として、平成20年度(予定)に英文論文集(TBRL: *The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era.*[仮題])を刊行する。

(6) 日本研究班

①「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分になされていない。平成16年度以降は、江戸期の近世写本・刊本、特に歌書関連の貴重書について組織的、総合的に行い、研究の基盤を整備するとともに、これを広く社会に公表し、研究の進展に資することを期して、研究を継続中である。

[研究実施概要]

a) 岩崎文庫貴重書書誌プロジェクトは、平成15年度までに、室町時代以前に成立した古写本・古刊本について、詳細な書誌情報を記載し豊富な図版を掲げた『岩崎文庫貴重書書誌解題』Ⅰ～Ⅳを公刊してきたが、このたび平成19年3月、『岩崎文庫貴重書書誌解題』Ⅴの刊行に至った。

b) 江戸時代の近世写本・刊本を調査し、研究会を催して岩崎文庫の全体像を把握する作業を継続中である。また、上記解題のⅥ以降の出版計画のため、岩崎文庫所蔵の歌書について情報の収集を始めた。

＜内陸アジア研究部門＞

(7) 中央アジア研究班

①「St. ペテルブルグ文書研究」

東洋文庫所蔵のマイクロフィルム(ロシア科学アカデミー東洋学研究所St. ペテルブルグ支部所蔵文書)のうち、ウイグル語・ソグド語・コータン語・マニ文字文献およびモンゴル語文献に関する解題カタログの整備をめざし、ウイグル文献を中心に、文献学・言語学・仏教学・歴史学等の側面から個別に読解研究をすすめる。5、6世紀から15世紀にいたる中央ユーラシア資料文献学に欠かすことのできないこれらの資料は、小断片にいたるまで精査する価値をもつ。したがって資料使用の基盤を形成することがすべての基本となる。個別文書研究と全体像の明示とを並行してすすめていくことにより、出土地域の歴史像解明をはかる。

[研究実施概要]

a) ウイグル文書に関する研究資料を充実させるため、画像スキャニングをおこない、これとデータベース上の目録を組み合わせる作業を継続した。3月末までに全4200件約1万コマのスキャニング保存を終了した。ただし、St.ペテルブルグ支部との契約により、画像資料は一括公刊することができないため、当面本研究グループ内部での閲覧を図ることとする。

b) とりわけウイグル文書は、他機関所蔵のものとの比較対象が必須である。その総合カタログを出版するため、個別文書研究をすすめ、必要に応じて現地での確認調査をおこなうと同時に、ある程度ウェブ上でデータ入手が可能なベルリン所蔵文書と、基礎データ収集が済んでいる大英図書館所蔵のウイグル文書についてカタログ化を進めている。また、中国新疆の二つの博物館との共同研究を模索しはじめ、トゥルファン出土の未発表文書を共同で研究する方法を検討し、資金および研究組織案を検討している。

②「近現代中央アジアにおける民族の創成」

1991年のソ連解体と中央アジア5ヶ国の独立以来、現今のアフガニスタン情勢まで連動して、中央アジア諸国およびヴォルガ・ウラル地域ではあらたな「民族意識」がさまざまな形で姿を現し、周辺地域(たとえば新疆ウイグル自治区)にも影響を与えている。このような現代中央アジアの動態を近年における東洋文庫の収集資料を活用して主に歴史学の方法によって検証し、「国民国家」の枠組みを問いなおしつつ、「民族」創成の多様な論理と過程を明らかにする。この地域に「民族意識」の原形が生まれたのは、19世紀末のことであり、これを創出したムスリム知識人たちはおもに新聞・雑誌などの新しいメディアを活用しながら民族的なアイデンティティの形成にあたった。したがって、19世紀末から20世紀初頭に刊行された新聞・雑誌は、重要な史料であり、これをもとに実証的な研究を進める。

［研究実施概要］

a) 近代中央アジア新聞・雑誌コレクションの整理と研究を継続した。

b) 現地資料・関連研究図書の収集：ウズベキスタン、タジキスタン、タタールスタンなどで刊行されている最新の研究文献を調査し、さらに、1980年代後半のペレストロイカ期から2000年の間に行われた、中央アジア近現代史に関する研究動向の調査を行った。その成果として、平成17年度に刊行したTBRL No.7 *Research Trends in Modern Central Eurasian Studies*(Part2)につづけて、TBRL No.10 *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-18th Centuries* を刊行するため作業を継続した。

c) 研究チーム以外の研究者の参加も得て、本テーマに関する研究会を継続的に開催した。

d) 他の研究プロジェクトとの共催で11月25－26日、国際ワークショップUyghur Society, Culture and Ethnic Identity in Xinjiang and Central Asia を開催した。本ワークショップでは、ロシア・ソ連領内の中央アジアと清朝・中国領内の東トルキスタンとをまたいで展開された「ウイグル人」の創成プロセスについて、最新かつ実証的な研究成果をもとに幅広い議論を行うことができた。

e) 1月10～17日に、研究協力者の濱本真実氏を北海道大学図書館およびスラブ研究センターに派遣し、18世紀帝政ロシア治下のタタール人とバシキール人に関する法令・行政文書の調査を行った。これはロシア領内におけるムスリム諸民族の処遇を明らかにする上で大きな意味をもつ。

③「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」

これまで、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた中国の内地及び内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、現地で作成された生の漢文文書を分析研究することによって、諸民族の歴史の実態を明らかにすることにある。このために、本研究は、3世紀から13世紀に至る時代に作成された漢文文書を分類し、それぞれの文書がどのような特質をもっているかを、書誌学的、あるいは古文書学的に研究することによって、諸種文書の外形的な特徴、即ち、様式を究明するとともに、内陸アジア諸民族の歴史の実態を明らかにすることを期す。

［研究実施概要］

a) ロシアのSt.ペテルブルグの東洋学研究所所蔵の漢文文献マイクロフィルムの107リール（Nos.256-362リール）の点検を終了し、各リールに含まれている文献の整理番号とそのコマ数とを示す対照一覧表を作成し、つづいてこの一覧表にもとづき、既存の『俄蔵敦煌文献』（全17冊、図版集、上海古籍出版社）に収録された文献（図版）の所在（巻数・頁数）をその一覧表に明示した。その結果、既存の『俄蔵文献』に収録されていない漢語文献が約300件、漢語、ウイグル語文献が約200件存在することが明らかとなり、それらの焼付写真を作成した（10リール）。

b) 上記a）において作成した漢語文献の対照一覧表のデータ入力の作業はほぼ完成し、現在はその入力データを校正している。

c) 上記の107リールの漢文文献中に、トルファンやクチャ、ホータンなどから出土した文献がどの程度含まれているかを調査し、『俄蔵文献』に未収録のホータン収集文献約150件がリールに収録されていることが明らかとなった。

d) 本研究の研究課題である『敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究』に基づく研究成果を平成20年度に刊行するために、研究分担者・研究協力者（計20人）への原稿依頼と分担、執筆テーマの調整とを行った。

e) 本研究テーマを促進させるために「内陸アジア出土古文献研究会」を定期的に開催した。

(8)チベット研究班

①「チベット蔵外文献の書誌的研究」

河口慧海師将来文献を含む＜東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録＞のデータベース作成を継続する。また、チベットの伝統的仏教学の基礎的研究書である『宗義書』文献のテキスト校訂と

語彙収集およびデータベース化を行う。

［研究実施概要］

a) ＜東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録＞の編纂カードを点検して、目録データベースの作成を行った。

b) チベット人研究協力者の協力のもとに東洋文庫所蔵チベット蔵外文献中の河口慧海師将来文献および関連文献のテキスト校訂と語彙収集およびデータベース化を進めた。

c) チベットの伝統的仏教学の基礎研究書として、従来より研究を進めてきたトゥカン『宗義書』(既刊6冊)の続編として『西蔵仏教宗義研究　第8巻(トゥカン"一切宗義"序章:インド宗教の巻)』を刊行した。

＜インド・東南アジア研究部門＞

(9)インド研究班

①「南アジアにおける支配権力ームガル帝国支配に関わる文書史料の研究」

近年、インド、ヨーロッパ、アメリカにおいて、ムガル時代の歴史研究は、著しく進んでいる。従来は、ムガル帝国の各皇帝ごとの歴史書や通史をもとにムガル帝国支配の研究をおこなってきたが、一次史料たる皇帝のファルマーン(勅令)や各種公文書をもとにした研究へと移っている。本研究においても各種公文書の収集整理をめざして、今後の本格的なムガル史研究につとめるものとする。

［研究実施概要］

a) 一次史料である皇帝の命令書(ファルマーン)について、研究書、研究論文を参照し、従来の研究状況を調べるとともに、ファルマーンの英訳およびペルシア語原文について研究調査を進めた。また、ファルマーンの年譜を作成し、内容の整理を行った。

b) 研究協力者である末廣朗子氏をインドに派遣し、現地における史料研究の動向とファルマーンについて、調査を行うとともに、ハイデラバード大学、オスマニア大学、アンドラ・プラデーシュ州立文書館の専門研究者に研究状況を聞いた。

c) 研究会において、末廣氏がインドでの調査について報告を行い、ムガル時代のファルマーン研究の新たな方法について検討した。

(10)東南アジア研究班

①「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」

古くから東西海洋交易の要衝となった東南アジアの港市には、東西世界の商人が逗留するとともに、中国やインド、西アジアなどから多くの移住者が流入した。東南アジアの港市は、地元の人々をはじめ移住者や奴隷さらにはそれらの人々の間に生まれた混血者など、多様な人々が居住する空間となった。他方でこうした港市は、地元世界の外部への窓口となり、地域社会の結節点ともなった。本研究計画では、近代移行期の東南アジアの港市を取り上げ、港市住民がどのように「自分たち」と「彼ら」を区分したかを考察することで、彼らによる地元世界と広域秩序世界を構築するダイナミズムを探る。

［研究実施概要］

a) 近代移行期の東南アジア社会に関する文献資料の収集と分析を進めた。とりわけ本年度は、混血者を生み出す背景となる外来者と現地人女性との交流をめぐる資料収集に収穫があった。

b) 弘末雅士研究員が1月14日～22日にインドネシアのジャカルタに出張し、20世紀初めの新聞の調査をとおして、東南アジアの港市で展開した都市文化の調査研究を進めた。

c) 文献調査や訪問調査の成果を、平成20年度にTBRL No.11 *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries* として出版する予定である。そのための研究会を10月21日に実施した。

＜西アジア研究部門＞

（11）西アジア研究班

①「イスラーム世界における契約文書の研究」

個人間の契約（売買契約など）にとどまらず、広く君臣契約や行政契約（徴税請負など）を含め、現存する文書や史料をもとに、イスラーム世界における契約を保証するシステムと契約によって結ばれる社会関係の全体像を検討する。

［研究実施概要］

a) 平成17年度に3ケ年間の研究成果としてシリア古文書館所蔵の17世紀ダマスクス州の徴税請負に関する台帳の分析とテキストを公刊（*Tax Farm Registers of Damascus Province in the Seventeenth Century*）したが、これを踏まえて、イスラーム世界における契約文書の国際比較研究を、国文学研究資料館アーカイブズ研究系の主催する「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」と連携して実施した。9月にトルコにおいて開催した国際ワークショップ「オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態」の研究成果については平成20年度の刊行を期す。

b) ヴェラム文書（東洋文庫所蔵、モロッコの羊皮紙契約文書）の研究を行い、平成20年度に研究成果を刊行するため、資料の分析を継続した。

c) 他機関のプロジェクト「中央アジア古文書研究」（京都外国語大学）、などと共同研究会を催し、イスラーム法廷文書に関わる研究者のネットワークの構築を進めた。

C. 各種研究会・講演会開催

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
研究会回数	10	14	7	9	2	5
参加人数	78	83	45	101	43	139

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
10	7	9	7	10	13	103回
76	52	77	78	79	170	1,021人

Ⅱ. 資料収集・整理

超域プロジェクト研究・アジア諸地域歴史・文化の基礎研究ともに、図書委員会の協議によりアジアの現状および歴史に関する一次資料（写本、文書史料、刊本等）、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の補充に努めた。中国雑誌については、インターネットアクセス権を取得したCNKI（中国全土知識インフラデータベース）の政治・経済・法律・歴史・哲学思想の部および台北中央研究院歴史語言研究所よりアクセス権を取得した「漢籍全文資料庫」についてアクセス範囲を拡充し、更なる研究の利便性の向上に努めた。また、東洋文庫所蔵図書・資料は、冊数約940,000冊に及び、現在、書誌に関するデータベース化は95％完了している。今年度は、現代中国関係資料と全欧文資料データのほかに和書6，000件をウェブサイトにおいて公開した。英文逐次刊行物についても鋭意資料のチェックを続け、平成19年度年度の公開を目指している。広く一般の利用に供するために書誌データの加工作業を続行中である。さらに、東洋文庫の蔵書のうち、欧文の稀覯書、および絵画資料についてデジタル化を行った。

A. 資料購入

区　分	和漢書	洋　書	その他 (マイクロフィルム等)
超域・現代中国研究	387冊	0冊	66冊
超域・現代イスラーム研究	25冊	2,085冊	0冊
東アジア研究	601冊	13冊	0冊
内陸アジア研究	0冊	160冊	0冊
インド・東南アジア研究	0冊	350冊	0冊
西アジア研究	0冊	578冊	0冊
共通(継続・大型資料)	1,022冊	272冊	75冊
合　　計	2,035冊	3,458冊	141冊

B. 資料交換

区 分	受　贈			寄　贈		
	和漢書	洋　書	計	国内	国外	計
単　　行　　本	673冊	1,091冊	1,764冊	790冊	1231冊	2,021冊
定 期 刊 行 物	2,550冊	566冊	3,116冊	3,307冊	2,364冊	5,671冊
計	3,223冊	1,657冊	4,880冊	4,097冊	3,595冊	7,692冊

C. 図書・資料データ入力数

平成18年4月1日～平成19年3月31日までの期間における、新収及び蔵書遡及のDB入力数は、下記の通りである。

洋　書	1,637	トルコ語図書	0
和漢書(含む・中国語)	2,109	南アジア諸語図書	347
キリル語図書	17	雑誌(和漢洋ほか)	7,452
ペルシア語図書	1,222	その他	21
アラビア語図書	491	合計	13,296件

D.　資料保存整理

(1)　　補修再製本・製本

①

	単 行 本		簡易製本
区分	和 装	洋 装	(洋装)
数量	裏打・補修 3,881枚　319冊	裏打・補修 1,933枚　87冊	48冊

②

区 分	定期刊行物	製帙・保存箱	地図類	その他	整理保全
数 量	0	289点	158枚	299枚	233点

(2)撮影・焼付

区　分	撮影齣数	フィルム反転	電子複写枚数	整理作業
数　量	26,580コマ	50リール	10枚	5件

Ⅲ. 研究資料出版

プロジェクト研究および基礎研究では、中国語・朝鮮語・満州語・ウイグル語・アラビア語・ペルシア語・トルコ語など、アジア諸語で記された文書・写本・刊本・地図などを用いて研究を行い、その成果を東洋文庫和文紀要・欧文紀要に掲載するとともに、和文・欧文の研究叢書(「東洋文庫論叢」・「東洋文庫欧文論叢(TBRL)」)、訳注書、書誌解題などを単行本として出版する。これらの成果は、現代アジアの諸問題の解明に寄与するばかりでなく、国際的な発信を通じて国内外に大きな刺激をあたえ、アジア研究のさらなる進展に貢献するものである。

A. 定期出版物刊行

・『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)　第88巻第1,2,3,4号　A5判　4冊(刊行済)
・『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko)*
No. 64　B5判　1冊(刊行済)
・『近代中国研究彙報』 第29号　A5判　1冊(刊行済)
・『東洋文庫書報』 第38号　A5判　1冊(刊行済)
・『超域アジア研究報告』 第4号　B5判　1冊(刊行済)
・*Asian Research Trends*　New Series No.2　A5判　1冊(刊行済)

B.　論叢等出版

・*Mémorial OJIHARA Yutaka –Studia Indologica*
(Toyo Bunko Research Library〈TBRL〉東洋文庫欧文論叢　No.9)　A5判　1冊(刊行済)
・『日中戦争期の中国における社会・文化変容』　A5判　1冊(刊行済)
・『トルコにおける議会制の展開―オスマン帝国からトルコ共和国へ―』　B5判　1冊(刊行済)
・『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅴ』　B5判　1冊(刊行済)
・『晋書食貨志訳註』　A5判　1冊(刊行済)
・『宋史食貨志訳註五・六語彙索引』　B5判　1冊(刊行済)
・*A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt*　A4 判 1 冊 (刊行済)

Ⅳ. 普 及 活 動

A. 研究情報普及

(1)東洋学講座

(春　期)共通テーマ:現代イスラームを語る
第493回　平成18年5月9日(火)
「近代イランにおける民衆運動の軌跡
ータバコボイコット運動・立憲革命・ジャンギャリー運動ー」
東洋文庫研究員

東北大学助教授　黒 田　　卓 氏

第494回　平成18年5月16日（火）
「現代アラブ世界とイスラームーイラク戦争から3年の現在から考えるー」
東洋文庫研究員
東京大学教授　　長 沢 栄 治 氏

第495回　平成18年5月23日（火）
「トルコのEU加盟問題とイスラーム」
東洋文庫研究員
立教大学教授　　設 樂 國 廣 氏

（秋　期）共通テーマ：近現代中国の地域社会と日本

第496回　平成18年11月7日（火）
「はじめにー近代中国研究と青島守備軍資料ー」
東洋文庫研究員　　本 庄 比佐子 氏
「山東懸案解決交渉と日本の新聞報道」
東洋文庫研究員
広島大学大学院教授　曽 田 三 郎 氏

第497回　平成18年11月14日（火）
「近現代の山東経済と日本　ー青島ビール・在華紡などを例にー」
東洋文庫研究員
信州大学教授　　久 保　　亨 氏

第498回　平成18年11月21日（火）
「山東農村の過去と現在　ー“三農”問題と社会変動ー」
東洋文庫研究員
宇都宮大学教授　　内 山 雅 生 氏

（2）特別講演会

第1回　平成18年7月26日（水）
（1）「唐代印刷史の諸問題ー「模勒」の字義と書籍印刷の普及をめぐってー」
北京大学教授　　辛　　徳 勇 氏
（2）「遼代のシラ=ムレン川流域地区の聚落分布からみる環境の選択」
北京大学教授　　韓　　茂 莉 氏

第2回　平成18年9月11日（月）
「中国宋代の妓女と地方政府ージェンダー史の事例研究ー」
カリフォルニア大学デーヴィス校 教授　　Beverly Bossler 氏

第3回　平成18年11月20日（月）
The Chinese Hi-Tech Professionals in Silicon Valley
サンフランシスコ州立大学 教授　　Bernard P. Wong 氏

第4回　平成18年11月24日（金）

「アラビア語文書資料の世界」

ウィリアム・メアリー大学 教授　　アブドゥル・カリーム・ラーフェク 氏

第5回　平成19年1月29日（月）

「南宋高宗の評価について」

上海師範大学古籍整理研究所 研究員 朱 瑞 熙 氏

第6回　平成19年3月2日（金）

「シルクロードの新出土文書ートルファン新出文書の整理と研究」

北京大学 教授　　栄　新 江 氏

(3)研究会（東洋文庫談話会）

第1回　平成19年3月19日（月）

「北部エチオピアに於ける歴史叙述の特色」

日本学術振興会特別研究員PD　石川 博樹 氏

(4)参考情報提供

『東洋文庫年報』 平成17年度版　　A5判 1冊（刊行済）

B. データベース公開

平成18年4月1日～平成19年3月31日までの期間に、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語、英語）に対するオンライン検索アクセス件数は、概略、以下の通りである。

区分/2006年4月～2007年3月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3月
漢籍資料(含・中文逐次刊行物)	1,117	1,530	1,282	1,179	1,205	1,277	1,274	1,321	1,064	1,396	1,183	1,293
中文・日文・欧文・ロシア新収図書目録	255	225	202									
中文図書(含・近中、逐次)	1,677	2,513	2,405	1,499	1,560	873	995	1,043	958	1,381	1,160	1,064
日本文図書(含・近中、逐次)	1,307	1,433	1,601	2,307	2,588	1,879	2,104	3,402	2,226	3,180	2,739	2,920
日本関係文献目録(含・近代、岩崎)	705	717	805	575	481	230	284	378	296	436	386	498
洋書(欧文図書)目録(含・近中)	924	783	639	826	682	742	554	669	620	849	749	1,137
洋書総合	1,517	1,085	1,417	1,280	1,069	1,204	1,352	1,767	1,625	1,328	1,065	1,212
アラビア語図書	943	875	592	966	927	930	1,091	1,005	965	1,146	999	1,325
トルコ諸図書(含・オスマン語)	325	335	269	428	262	232	238	328	292	351	369	308
ペルシア語図書	984	929	644	448	306	475	455	552	511	592	540	608
チベット語文献(河口・蔵外文献)	518	521	425	486	394	360	336	386	337	544	321	284
モンゴル語図書・資料	164	182	241	274	307	136	136	171	168	235	165	206
ウイグル語図書・資料	221	172	156	245	238	98	187	124	202	323	314	139
ビルマ語図書	248	228	182	226	207	229	190	211	174	209	164	146
インドネシア・マレーシア語図書	225	236	170	150	157	105	94	116	131	149	93	118
中央アジア研究文献目録	630	547	402	392	394	412	305	340	322	513	313	290
中東イスラーム研究文献目録	1,170	1,160	1,186	1,161	879	652	635	901	801	1,037	553	619
アジア歴史研究者ディレクトリ(含・インド仏教学関係)	181	217	317	523	465	177	212	214	219	337	121	369
画像DB(梅原考古資料、香港細版画等)	596	2,151	1,938	1,571	1,831	2,277	1,752	1,571	1,262	1,818	1,597	2,475
その他(別置ロシア・カザフ・朝鮮など)	4,169	5,004	5,114	5,536	5,584	5,549	5,785	5,863	4,839	7,363	5,228	5,931
合　計	17,876	20,843	19,987	20,162	19,536	17,837	17,979	20,362	17,012	23,187	18,059	20,942

Ⅴ．学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡にあたって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

(1)図書・資料の閲覧(協力)サービス

数量＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
閲覧者人数	189人	199人	224人	211人	279人	224人	
閲覧図書数	2,295冊	1,823冊	2,827冊	3,731冊	4,801冊	3,263冊	
レファレンス数	49件	54件	60件	57件	75件	60件	
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
	210人	175人	200人	197人	223人	203人	2,384人
	3,893冊	2,533冊	2,576冊	2,675冊	3,656冊	2,500冊	36,573冊
	57件	47件	54件	53件	60件	55件	681件

(2)研究資料複写サービス

A)マイクロフィルム・紙焼写真

区　分	申込件数
数　量	575件

B)電子複写

区　分	申込件数	焼付枚数
数　量	676件	36, 963枚

(3)研究資料の覆刻・増刷の刊行サービス

東洋学報　第86巻4号	370部
東洋学報　第87巻第1ー3号	各350部
Modern Japan-China Relations (TBRL 5)	80部
The Structure of Ancient Indian Society (TBRL 6)	80部
東アジアの都城と渤海	150部
宋会要輯稿　食貨索引　地名編	200部
近代中国研究彙報　第27号	50部
東洋文庫書報　第36号等2件	各50部
東洋文庫キャスラヴィー関係加賀谷コレクション・解説目録	30部
東洋文庫年報　平成16年度版	10部

(4)研究情報提供サービス

(5)広報普及

東洋文庫ホームページ(和文・英文)を随時更新した。

(6)研究者の交流および便宜供与のサービス

A)長期受入

1)平成18年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

石川　博樹(東京大学大学院PD)
「16、17世紀エチオピア北部社会の研究:牧畜民の流入とイエズス会布教の影響を中心に」
(平成16年度採用、同17・18年度3ヶ年間)

五十嵐　大介(中央大学大学院PD)
「マムルーク朝後期エジプト・シリアにおけるイクター制の崩壊過程と社会体制の変容」
(平成17年度採用、同18・19年度3ヶ年間)

河原　弥生(東京大学大学院PD)
「コーカンド・ハーン国期におけるフェルガナ・ムスリム社会の形成とイスラーム」
(平成17年度採用、同18・19年度3ヶ年間)

飯山　知保(早稲田大学大学院PD)
「士人層の変遷からみた金元代華北における社会統合と後世華北漢族社会形成の淵源」
(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

小笠原　弘幸(東京大学大学院PD)
「オスマン帝国における歴史意識―建国神話に見られる「起源」の記憶と創造の変容」
(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

森山　央朗(東京大学大学院PD)
「10～12世紀の中東におけるウラマーと地方史人名録編纂の社会史的研究」
(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

2)外国人研究者の受入

Claus M. FISCHER(ドイツ連邦ゲッチンゲン大学教授)
「近世日本の古典芸能、特に歌舞伎史の研究」
(平成16年2月8日～同19年2月7日・私費)

Jérôme BOURGON(フランス国立科学研究センター[CNRS]研究員)
「清朝の官箴類を中心とした中国法制史関係の資料調査と研究」
(平成16年6月8日～同19年3月31日・フランス政府資金)

Christophe MARQUET(フランス国立東洋言語文化研究所教授)
「江戸中期・後期の絵入り本と画譜」
(平成16年9月1日～同19年8月31日・フランス国立極東学院経費[東京支部代表])

Pierre-Etienne WILL(コレージュ ド フランス中国近代史講座教授)

「中国の官箴・公牘・政書類を中心とする文献の調査と研究」
（平成18年5月28日～同6月10日・フランス政府資金）

辛　徳勇（北京大学中国古代史研究中心教授）
「中国の歴史地図を中心とする文献の調査」
（平成18年7月1日～同7月31日、科学研究費補助金）

韓　茂莉（北京大学環境学院教授）
「中国の歴史地理を中心とする文献調査」
（平成18年7月1日～同7月31日、科学研究費補助金）

Harmen BEUKERS（ライデン大学医学系）
「医学関係資料を中心とする文献の調査と研究」
（平成 18 年 7 月 31 日～同 8 月 31 日・ライデン大学公費）

Elsa LEGITTIMO（国際仏教大学院大学 Ph.D）
「インド仏教学関係の文献調査」
（平成18年9月26日～同19年3月31日・極東学院奨学費）

Stefan KNOST（フランス近東研究所研究員）
「オスマン都市の自治的行政組織―タンジマート期以前のアレッポ―」
（平成18年11月21日～同20年11月20日、日本学術振興会外国人特別研究員）

栄　新江（北京大学中古史研究センター教授）
「東西交渉史を中心とする文献の調査」
（平成19年1月10日ー同3月10日・科学研究費補助金）

Deguilhem RANDI（フランス国立アラブ・イスラーム世界研究所教授）
「オスマン朝史を中心とする文献の調査」
（平成19年3月13日ー同3月24日・イスラーム地域研究）

B)外国人研究者への便宜供与

Bhutan
PHUNTSOK TASHI. Kheanpo　Director, the National Museum of Bhutan

China (Peoples Republic)

呉　麗 娯	中国社会科学院 教授
劉　詠 聰	香港浸會大学 教授
呉　　格	復旦大学 教授
陳　平 原	北京大学中文系 教授
陳　謙 平	南京大学歴史学系 主任
劉　大 可	山東社会科学院歴史研究所 所長
庄　維 民	山東社会科学院歴史研究所 副所長
任　銀 睦	青島市社会科学院 副院長

周　兆利	青島市社会科学院 研究員
張　樹楓	青島市社会科学院 研究員
劉　隆裙	嘉義大学史地学系　教授
張　斐怡	清華大学歴史研究所　教授
苗　書梅	河南大学歴史文化学院　副院長
劉　至兮	中国社会科学院経済研究所 研究員
葉　　坦	同上
趙　学軍	同上
袁　為鵬	同上
張　俊峰	山西大学 講師
何　培忠	中国社会科学院 研究員
周　一平	揚州大学 教授
張　永江	中国人民大学 教授
竇　　坤	北京市社会科学院 副研究員
靳　明全	重慶師範大学 教授
曹　家斎	広州中山大学歴史学系教授
朱　瑞熙	上海師範大学古籍研究所 研究員
栄　新江	北京大学中国古代史研究中心 教授
劉　厚生	東北師範大学 教授

China (Taiwan)

胡　暁真	中央研究院中国文哲研究所 研究員
陳　熙遠	中央研究院歴史語言研究所 副研究員
張　哲嘉	中央研究院近代史研究所 副研究員
梅　家玲	国立台湾大学 教授
黄　美娥	国立政治大学中国文学系 教授
黄　克武	中央研究院 研究員
祝　平一	中央研究院歴史語言研究所 研究員

France

Christian LAMOUROUX	Prof. , Ecole des Houtes Etudes en Sciences Socials.
Pascal GRIOLET	フランス国立東洋言語文化研究所 助教授
Deguilhem RANDI	Prof., CNRS

Germany

R. EMMERICH	Prof., Münster University

Korea

金　在弘	国立中央博物館歴史部 学芸研究官
朴　竣鎬	国立中央博物館歴史部 学芸研究士
李　恩廷	Prof. , Seoul National University.
M. Fatih Salmanoglu	Pusan National University, Dept. of International Trade
姜　成山	桜美林大学大学院PD

Kyrgyzstan

Ilhan ŞAHIN	Prof., Faculty of Humanities,

	Kyrgyz-Turkish Manas University
Lebanon	
Massoud DAHER	Prof. , Department of History, Lebanese University
Poland	
AGATA Bareja-Starzynska	Department Head, Turcology and Inner Asian Peoples, Institute of Oriental Studies Warsaw University
UK	
Joseph P. McDERMOTT	Prof. , Department of Chinese History, University of Cambridge
John BROCKINGTON	Prof., University of Edinburgh
USA	
Richard von GLAHM	Prof. , Department of History, UCLA
謝　美 格	Prof. , Stanford University
Donald J. MUNRO	Prof., Research Associate Center for Chinese Studieas, University of Michigan
許　曼	PHD, Columbia University
Uzbekistan	
Kuchkarov AKMALJON	Third Secretary, Embassy of Uzbekistan.
Vietnum	
阮　有 通	越南文化通信研究院 在順化文化通信研究 分院長
NGUYEN Ngoc	Prof., Phan Chu Trinh University
阮　景 洋	ベトナム大使館 参事官

VI. イスラーム地域研究資料室

本研究は人間文化研究機構と共同で実施され、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。
具体的には次の3つを柱とした研究活動を行う。

1. 現地語史資料の体系的収集
2. 文献情報ネットワークの構築
3. 文書史料による比較制度研究

[研究実施概要]

a) 現地語史料の体系的収集

研究協力者を派遣し、現地語史資料の体系的収集を開始した。今年度はまず東洋文庫所収史資料の欠本や異版を確認・補充することでコレクションの充実を図った。さらに、アラビア語資料については中東アフリカ地域で出版された人文・歴史・宗教分野の新刊書及び国内所蔵がなく今後の入手困難が予想される雑誌を収集し、オスマントルコ語については文学・法学分野の図書、ペルシア語ではマイクロフィッシュを中心に収集を行った。

b) 文献情報ネットワークの構築

文献情報ネットワークの立ち上げに向け、新収書誌・事業紹介や書誌データベースを搭載したホームページの発注・設計を行った。これからデータ入力を行うため段階的に公開を進めていくが、平成19年4月末にホームページの仮オープンを予定している。

また、平成19年3月に国立情報学研究所及びアラビア文字資料を所蔵する大学図書館13機関の参加を得て「アラビア文字図書DB連絡会準備会議」を開催し、アラビア文字資料の整理と公開について各機関での取り組みや問題点を報告・協議した。

c) 文書史料による比較制度研究

文書史料による比較制度研究では、近現代を含む文書史料（とりわけイスラーム法廷文書）をもとに、その地域間比較を通してイスラーム地域の社会制度・社会関係の研究を行った。

平成18年9月には研究分担者がアンマン(ヨルダン)にて開催の「歴史的シリアBilad al-Sham」国際会議に参加し、同じく9月に歴史的アーカイブズの多国間比較プロジェクト（国文学研究資料館）との連携により、アンカラ（トルコ）において国際シンポジウム「オスマン朝と中近世日本における国家文書と社会動態」を開催した。

また、海外研究協力者としては、平成19年1月に、ドイツから来日のシュテファン・クノスト氏（平成18年11月より2年間滞在予定）が研究会を開催し「宗教施設の法的地位と社会的役割：オスマン朝期アレッポのモスク」と題して研究成果を発表したほか、3月にフランスより来日したランディ・ドゥギエム氏は15日に研究会「ワクフ研究の歴史をたどる：規範から拡散へ」を開催、また17-18日には中央アジア古文書セミナーとの合同研究会にて研究発表講演（「革命的流行：オスマン朝最終世紀の公立学校」）を行った。

平成18年度財団法人東洋文庫特別事業報告書

財団法人　東洋文庫
理事長　斯波義信

平成19年3月31日までに行われた財団法人東洋文庫特別事業の報告概要は下記の通りです。

事業内容

Ⅰ.特別調査並びに研究成果の編集等

(1)日本学術振興会科学研究費補助金等による事業

A)　平成18年度科学研究費補助金による事業

1)　研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業
[名　称]「東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム」
[東洋文庫電算化委員会委員長:斯波義信]
[分　野]「東洋学全般」
[目的・内容];
本プロジェクトは、東洋学に関する世界5大機関の一つに数えられる研究所・図書館である(財)東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数約400,000件、冊数約900,000冊におよぶ大量の他言語資料について、従来構築した書誌データのオンライン検索の基礎の上に、画像資料をデジタル化した上、インターネットを通じて内外の研究者が自由に利用できるようにすることを目指している。

本文庫のモリソン・岩崎コレクションには国宝・重文を含む貴重な文献・絵画が含まれる。これらは、本文庫として従来から細心の注意を払って保存してきたが、近年の電子技術により、これをデジタル撮影して保存し、画像データベースとして公開すれば、内外の要請に応えることができ、また資料保存の面でも劣化に対応することができる。特に地図(江戸地図200種、欧米人のアジア地図300種)、銅版画、浮世絵、挿絵本、中国南北朝拓本、考古学者の中国・朝鮮・日本関係発掘資料、器物写真など、デジタル化して画像資料として研究者に提供する価値のあるものが多い。また、マルコ・ポーロ東方見聞録のテキスト50数種、16世紀以来のイエズス会士の書簡、江戸時代のオランダ商館関係者の記録などの古文書、岩崎家収蔵の万葉集、源氏物語、徒然草などの貴重古典籍なども、全文テキストとして公開することが内外研究者から期待されている。昨年度から、画像データベースの構築に着手した。台湾の国家典蔵数位計画、上海の資料構築計画、シンガポールアーカイブのデジタル資料状況などを視察した上、独立行政法人情報学研究所と技術提携し、資料のデジタル化を試行してきた。文化庁・総務省によるデジタルアーカイブの構築にも情報学研究所を通じて画像資料を提供している。本文庫として、デジタル化の対象となる膨大な資料を擁している。デジタル化計画は着手したばかりであるが、関係諸機関との協力の下に、できるだけ早く目的を達成する。

[事業実施概要]
(1)書誌データ
欧文逐次刊行物3,400件、現代中国語文献資料20,000件の書誌データの入力を完了した。次年度初めにWebsiteに公開する予定。
(2)画像データ
次の資料につき、デジタル撮影と画像取り込みを完了した。
①地図　　140件

②絵画　　140件
③浮世絵　　140件
④考古器物　5,000件
(3)全文テキスト
次の資料につきマイクロ撮影と画像取り込みを完了した。
①イエズス会士書簡　6,000頁
②岩崎貴重古典籍　　2,000頁
これらの画像は目下館内の閲覧に供しているが、次年度にはWebsiteに公開する予定である。

2) 基盤研究(B)の対象事業
[課　題]「第一次大戦期日本の山東経営をめぐる総合的研究」　　[研究代表者:本庄比佐子]
(平成15年度採択、4カ年間・最終年度)
[目　的];
第一次世界大戦時に日本はドイツの膠州湾租借地を攻略し、青島及び山東鉄道沿線における諸権益の獲得・拡張を図った。このことは、それまで主に東北地域と台湾に限られていた日本の勢力圏を中国の関内地域に拡大していく端緒となった。
本研究では、①この時期、すなわち1910年代後半から20年代初めにかけて青島守備軍を始め満鉄、農商務省などの機関により進められた山東地域の実態調査の全容を明らかにし、②それらの調査資料を利用しつつ、日本の山東経営及び当時の山東地域の政治・経済・社会に関する総合的な考察を行う。
[研究実施概要]
(1)前年度末に本研究の中間報告として論文集『日本の青島占領と山東の社会経済』を東洋文庫から刊行することができたが、これを基礎にして「国際シンポジウム＜日本の青島占領と山東の社会経済＞をめぐって」を開催した。シンポジウムでは、論文集に寄稿を得た山東社会科学院および青島市社会科学院の研究者を招聘し、また国内では中国史だけでなく日本史研究者の参加を得て、日本軍の占領下に進められた日本資本の山東進出の実態を中心に日本の山東経営の諸問題について報告と討論が行われた。そして、山東還付後の変化、関東州租借地経営との比較の必要など更なる研究の発展と深化のために有益な示唆を得ることができた。
(2)シンポジウム参加の山東社会科学院庄維民・劉大可両氏を囲んで、両氏の共著『日本工商資本与近代山東』について本研究メンバーによる合評会を開いた。本書は日本の山東侵略に関する総合的な研究書であり、その研究方法が従来の中国の研究に見られた「半植民地化」論によらず、日本の資料をも系統的に使って山東の社会経済の変動の一要因として日本の影響を具体的に分析している点に注目した。日本軍の青島占領下における日本資本の鉱工業・商業経営・金融業などへの進出問題を中心に、焦点のかみ合った討論ができた。
(3)過去3年間の資料収集・調査の結果を「青島守備軍編刊書・報告書目録　附・解題」にまとめ、研究成果報告書に収録した。青島守備軍の各部門及び山東鉄道管理部が作成した調査資料をまとめ、うち主な資料についてはメンバーが分担して解題を作成したものである。日本の山東経営策をみる上で青島守備軍の行った調査活動とその報告書の検討は欠かせないが、従来それらを一覧できる目録はなく、本目録は今後の研究に寄与するところ大であると考える。

3) 基盤研究(C)の対象事業
[課　題]「朝野類用の総合的研究」　　[研究代表者:渡辺紘良]
(平成17年10月追加採択、2カ年間・最終年度)
[目　的];
『朝野類要』は、宋代官制用語の簡にして要を得た書として有名であるが、従来、この書自体の研究は皆無であった。中華書局の唐宋筆記叢刊にも採録されていない。我々は宋史選挙志の研究

(『宋史選挙志訳註』3冊刊行)を踏まえ、科学研究費補助金(課題名「宋代の経済政策及び関連する諸政策の総合的研究」)の支給に預かり、過去数年間、研究を進めてきたが、今回、その研究の完成をめざし、以下の課題を達成させようというものである。①半ば完了している本文の解読を更に推進し、全体の詳細な訳注を完成させる。②種々版本の研究を徹底させる。③著者趙昇について可能な限り、その人物像を明らかにする。

[研究実施概要]

(1)平成18年4月、北京大学を訪問し、『朝野類要』刊本、編者、内容、訳註方法等について意見の交換を行った。昨年度の北京大学大学院演習科目『朝野類要』担当教授張希清氏来日を承けたものである。

(2)その際、北京大学図書館を訪ね、四庫全書本の底本(恵棟校本)調査に当たった。底本調査の結果、そこには恵棟のみならず、四庫館員の校訂作業の形跡を多く発見できた。北京では、社会科学院及び中国国家図書館をも訪ね版本調査に当たった。

(3)平成18年7月には南京大学、9月には台北に国家図書館を訪ね、それぞれ版本調査に当たった。以上の各地の版本調査をもとに、校勘記を付した明刊本『朝野類要明刊本校証稿』を作製した。

(4)平成19年1月には、上海師範大学朱瑞熙教授を招聘した。教授は宋代科挙官僚制研究の第一人者として知られており、特に『朝野類要』には造詣が深く、参加いただいた研究会に於いて得られた知見は多大であった。

(5)編纂者の趙升については、天理大学図書館所蔵『重編詳備砕金』の「双桂書院」及び「趙宅書籍鋪」なる記載によって、「書鋪」経営者或いは書店主(出版人)であったことをつきとめた。

(6)『朝野類要』330条文全体の訳注を完成させた。

(7)以上の成果を基に平成19年3月、報告書『朝野類要の総合的研究』を刊行し、朝野類要訳注のほか、「索引」「朝野類要編纂者趙升考」「明刊本朝野類要校証稿」等を掲載した。

4) 基盤研究(B)の新規対象事業

[課　題]「古代インドの環境論」　　[研究代表者:原　　實]

(平成18年度採択、3カ年間・初年度)

[目　的];

科学技術、機械文明の発達は反面自然破壊を結果し、近年生態系の変化や地球の温暖化が問題視され、人間とそれを取巻く自然環境との共存が識者の注意を喚起しているが、この問題が古代インドにおいてどのように考えられていたかを見直そうとするのが本研究の目的である。

インドには古くから「不殺生」の思想があり、それは仏教の「山川草木悉有仏性」「草木国土悉皆成仏」の教義を通じて我が国にも伝えられた。その思想的背景をより体系的に検討する為に、この視点から梵文原典や漢訳仏典を詳細且つ綿密に検討し直す必要がある。

研究代表者は先ず現在古代インド乃至仏教の環境問題に関心を寄せている欧州の有力な学者を訪ねその教示を得つつこの研究に国際性を持たせ、その水準に於いて同学の諸氏の協力の下、この研究を進めていきたいと考える。

[研究実施概要]

平成18年4月、日本学術振興会の内示を得、同年7月研究補助金の交付を受けて、本研究は財団法人東洋文庫に事務局を置いて正式に発足した。折から、研究代表者は英国のエジンバラで開催された第13回国際サンスクリット学会に参加して、本邦においてこの研究が開始されることを宣言し、関係者の理解と協力を要請する機会を持った。

平成18年10月24日、本郷学士会館分館において最初の開合を持ち、研究代表者は彼のこれまでの研究を報告して本研究の趣旨を明らかにし、その線に沿って各々の研究分担者がそのような形で参加し得るかを検討し確認した。

次いで平成19年1月16日、同じ会場において、研究分担者で日本仏教を専攻する末木文美士は10世紀の天台の学僧・五大院安善の草木成仏説の系譜を明らかにした論稿を報告して、その後討論に

入った。次回は4月3日、岡田真美子が発表する予定である。
海外からは偶々別のプロジェクトで来日中であったハンブルグ大学のL. Schmithausen とエジンバラ大学のJ. L. Brockington 両人を東京大学及び東洋文庫に招いて講演及び討論の機会を持った。
尚、上記二回の討論会でこの問題に関心を寄せている松村淳子(神戸国際大学)、北田信(ドイツ・ハレ大学)両名を新たに研究分担者と研究協力者に加えることを決定した。

5) 基盤研究(C)の新規対象事業
[課　題]「敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究」　[研究代表者:土肥義和]
(平成18年度採択、3カ年間・初年度)
[目　的];
本研究は、旧来、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた敦煌・トルファンなど内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、現地で作成された生の漢文文書を分析することによって、諸民族の歴史の実態を新たに研究することにある。これに関連して、近年東洋文庫がmicrofilmで入手したロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト・ペテルブルク分所の漢文文書がどのような特質をもっているかについて、書誌学的、あるいは古文書学的な整理と研究を行う。このために、本年度は、「サンクト・ペテルブルク東洋学研究所所蔵漢語文献microfilm(107リール)文献番号・コマ数対照表」をデータベースとして作成すること、及びそれらを共同で利用・研究する研究者組織をつくることを目的とする。
[研究実施概要]
年度の初めに確定した研究計画にしたがって、平成18年度は、次の調査・研究を行った。
(1) サンクト・ペテルブルク東洋学研究所所蔵漢語文献microfilm(107リール)の『文献番号・コマ数対照一覧表(稿)』のデータベース化はほぼ完了した。
(2) 上記(1)の「文献番号・コマ数対照一覧」のうち、既存の『俄蔵敦煌文献』(全17冊、19000余点)に収録されていない漢語文献(13リール)を、研究用材料として集積した。
(3) 上記(2)の史料を内容別に分類・研究するために、研究協力者(池田温・氣賀澤保規・関尾史郎・伊藤敏雄・石田勇作・張娜麗諸氏)と合宿会議を開催した。(2006年9月28・29日)
(4) 本研究が対象とする漢語文献(microfilmや複製写真)を補充するために、原文献を所蔵する中国の諸機関(旅順博物館・開封市文物管理委員会・龍門石窟研究院・北京大学図書館・中国国家図書館など)を訪問し、現物の調査と学術交流とを行い、北京大学歴史系においてはトルファン文書に関する新収情報を得た。(2006年12月21～29日)
(5) 個別研究として、土肥義和は、北京大学の栄新江教授より提供されたトルファン出土の武周期戸籍残巻(6断片、66TAM360:3)の鮮明な写真について、戸籍の作成年次や記載内容を検討して、唐代西州における均田制(給田制)の一側面を明らかにした。(「武周天授三年(692)西州高昌県戸籍の復元と考察」と題して、2007年4月21日に発表)
(6) 個別研究として、片山章雄は、1995年に実見した1文書を含めて旅順博物館所蔵のトルファン出土物価文書を扱い、上記(4)の調査による再確認と新たな成果を得た。「胡」を冠する「胡粉」などの物品にも言及したが、いかに胡漢雑居の問題に繋がるかが課題である。(11. 研究発表〔雑誌論文〕参照)

B) 平成18年度三菱財団人文科学研究費補助金による事業

①[課　題]「中国社会経済史用語解(宋代篇)作成の研究」　[代表者:斯波義信]
(平成17年10月～20年9月・3カ年間・第2年度目)
[目　的];
中国社会経済史の研究が興って約100年に近いが、この研究の基礎前提をなす漢籍史料の校訂・読解・および必要情報の抽出という作業段階において、これを容易にする専門的な辞書・用語解がまだ整っておらず、研究の推進や普及を困難にしている。中国社会経済の用語は、用例・用

法ごと、時期・地域ごとに多義かつ複雑であるのに、専門辞書が皆無にちかく、詳細な漢和辞典においてもまれにしか掲載していない。本研究はこれを打開するため、これまでに蓄積された用語知識を修正してデータベース化しつつ、研究者が常備使用できる用語解を作成することをめざし、とりあえずこれを宋代史について実施する。

東洋文庫では、創立当初からの継続的事業の一つとして、中国経済史の基本史料に当たる13種の歴代正史食貨志(経済・財政記録)の詳しい訳註を作成してきた。このうち最も大部で、しかも元・明・清時代の制度や実体のルーツを記録する『宋史』の食貨志篇について、その訳註を逐次刊行し平成17年度にその完成を見るに至った。

そこで、これまでに蓄積された用語解釈を選定集成し、国内及び海外の宋代社会経済史の研究者が常時必携参照し、研究全体の推進に資すべき用語解の編纂を計画した。用語の選定範囲は基本的には『宋史』食貨志篇の各章とするが、各章の記述の源泉をなす『宋会要輯稿』食貨篇の語彙索引(現在同時推進、刊行中)及び専門学術書中の附註なども広く参照し、また各語彙の用例、用法、典拠史料、時期別、地域別の限定も付し、要するに実用的な辞書機能を帯びた用語解釈の集成を行なうものである。この企画を実現し、さらに将来その成果を日本文・英文で刊行することに至れば、中国社会経済史の研究の推進と解釈の深化が大いに期待される。

[研究実施概要]

(1) 前年度に引き続き、まず《用語解》に収録する語彙の選定、解説の範囲及び項目、すなわち語彙の用法、用例、典拠記事、時期及び地域の特定、そして、この資料をデジタルデータベースとして入力する方式・準則を定めるための作業を継続し、更に、役割を分担して、《用語解》の原稿作成に入った。

(2) 語彙選定については、作業上『宋史』食貨志の上巻、すなわち田制・税制・衣料生産・物資買い上げ制・輸送制・賦役制・救済制等、「食」に関する部分(A班)と、『宋史』食貨志の下巻、すなわち会計・幣制・専売制・商業税・国営商業・物価対策・海外貿易等、「貨」に関する部分(B班)とに分け、班ごとに原稿の作成をすすめている。

(3) 選定語彙及び用語解釈の原案を審議し、記述準則を共有するために定期的に会合を行った。また、共同研究者は準則を共有しつつ、用語解釈の作成と入力を継続した。

(4) これまで進めてきた『宋会要輯稿食貨索引』一般語彙の編集作業を、本事業の中に統合し推進中である。

(5) 平成19年度以降は、《用語解》の成稿作成と入力を継続し、全体で定期的に会合して問題点を調整する。また成稿上の用語と解釈について、その英語表記の検討に入る。

(6) 平成20年度前半までに、各自分担の作業を完了させ、後半には逐次会合を持ち、総合的な最終調整を行う。

②[課題]「清代諸領域の歴史的構造分析:総合研究
－清代東アジア・北アジアにおける諸領域の政治・社会・経済・民族・文化の展開－」

[代表者:石橋崇雄]

(平成 18 年 10 月～20 年9月・3ケ年間・初年度)

[目　的]

清朝史における従来の研究成果は目覚ましいが、清初(入関前と入関後)・清中期・清末(近代)の各時期における政治史研究、中国内地についての社会経済史研究、東北部研究、藩部研究、露清関係研究など、諸領域世界のそれぞれ特定の時代内、あるいは領域区分内における個別研究の段階に止まっており、諸領域世界相互に亘る総合研究はなお殆ど行われていない。こうした現状認識から、本プロジェクトは新たな清朝史研究の在り方を提示する具体的作業を遂行する。

[研究実施概要]

初年度における研究作業の一環として、全体計画の打ち合わせを重ねており、現在、 共同研究者による北アジアにおける現地調査・研究の準備を進めている段階にある。